



Title	第一部 通史 . 第四編 キャンパスの変遷 . 第六章 二一世紀に向けての札幌キャンパス形成 一九九六～二〇〇一年
Citation	北大百二十五年史, 通説編, 294-301
Issue Date	2003-12-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/28168">http://hdl.handle.net/2115/28168</a>
Type	bulletin (article)
File Information	4(6)_294.pdf



[Instructions for use](#)

以上のように、この時代は緑地整備や案内看板などの構内環境整備が進む一方で、新築・更新される施設も構内環境との調和が図られて計画され、将来のキャンパス計画の骨子となった。

## 第六章 二一世紀に向けての札幌キャンパス形成 一九九六～二〇〇一年

本章で扱う六年間は、北海道大学が初めて総合的なキャンパス整備の計画を立案して、それに連携するように施設・環境整備を実現化していった時期である。そこで本章では、キャンパスの変遷を記述するために、施設整備を担保するキャンパスの環境整備計画の中身を見ること、また実現したプロジェクトと計画との関係を見ることという複眼的な視点を設定する。

この時期の北海道大学を取り巻く状況の変化は、著しいものがあつた。二一世紀を目前にして、新たな時代の進展や社会の変化に適切に対応できるように、大学院の整備拡充をはじめとする大学における教育研究の内容及組織の見直しが行われた。その中で、改革の目標となる大学の未来像を現実化するために、新しい教育研究を可能とする場をいかに整備するかが大きな課題となったのは言うまでもない。その結果がキャンパス・マスタープラン96の策定であり、それに伴うキャンパス環境の整備であつた。キャンパス・マスタープランという将来にわたるキャンパスの環境形成にかかわる計画を基にして、オープンスペースをキャンパスの空間的骨格と位置づけ、施設・環境整備がキャンパスの北部も含めて全体的に展開し、様々な整備がなされていった。これには、長年の間キャンパスを南北に二分していた北一八条道路がアンダーパス化され、地上部に遊歩道が整備されてキャンパスが実質的に

連続化し、全体として一つのキャンパスとして扱われていったことが大きく作用している。

## 第一節 「キャンパス・マスタープラン96」の策定

「キャンパス・マスタープラン96」の策定の契機になったのは、一九九二年五月に開催された部局長連絡会議及び評議会において、廣重力学長より、「二十一世紀へ向けて、新しい時代の進展や社会の変化に適切に対応できるように、現在、大学院の整備構想、各学部の改革構想、そのほか地球環境に関する研究機関等ソフトについては各委員会で検討されているところではあるが、このことに関連して本学の施設整備の充実のために、キャンパスの土地の有効利用、建物配置計画、交通計画、環境整備計画等全般について検討し、マスタープランを作成する必要がある、施設計画委員会などで審議検討を進めてもらいたい。」との発言を受けて、「二十一世紀に向けて、教育・研究内容の変革に対応する有機的な施設の構成をはかるため、従来のいきさつには拘泥せず、新しい発想で取り組み全体として整合性のある理想的なキャンパスのマスタープランづくりを目指す」べく、ワーキンググループが設置されたことにある。翌年十二月には「北海道大学キャンパス・マスタープラン中間報告 土地利用の方針」として検討結果が取りまとめられた。この段階で、大学キャンパス全体の骨格が示され、土地利用の基本方針が立てられたのである。

その後、大学院重点化の進展、教養部が廃止され、高等教育機能開発総合センターの発足に伴う学部一貫教育体制の発足、学術情報関連施設の統合やユニバーシティ・ミュージアム構想の検討、さらには、北一八条道路計画の決定や構内環境計画の在り方の検討、といったキャンパス計画にとって極めて重大な情勢の進展があった。また、一九九五年に就任した丹保憲仁総長が就任当初の問題提起事項をまとめた「北海道大学の懸案事項について

の総長メモ（教育編）（九五五年八月作成）において、キャンパスの整備という視点からキャンパス・マスタープランの重要性が位置づけられた。これにより、九五五年十二月、マスタープランを検討する専門委員会として、施設計画委員会のもとに「キャンパス・マスタープラン委員会」が設置された。委員会における一九回の審議を経て、九七年二月、「北海道大学キャンパス・マスタープラン96」が策定された。

## 第二節 「キャンパス・マスタープラン96」 の位置づけと基本的考え方

「北海道大学キャンパス・マスタープラン96」（図4-4）は、北海道大学が自主的に策定したもので、二一世紀に向けて雄飛すべく大学の将来を睨んだグランドデザインである。策定にあたっては、大学の教育研究機構・組織の将来構想であるアカデミック・プラン、土地利用の基本方針、空間的な骨格といったフィジカル・プラン、その実現のプロセスなども含め、より具体的な将来像を描くことと

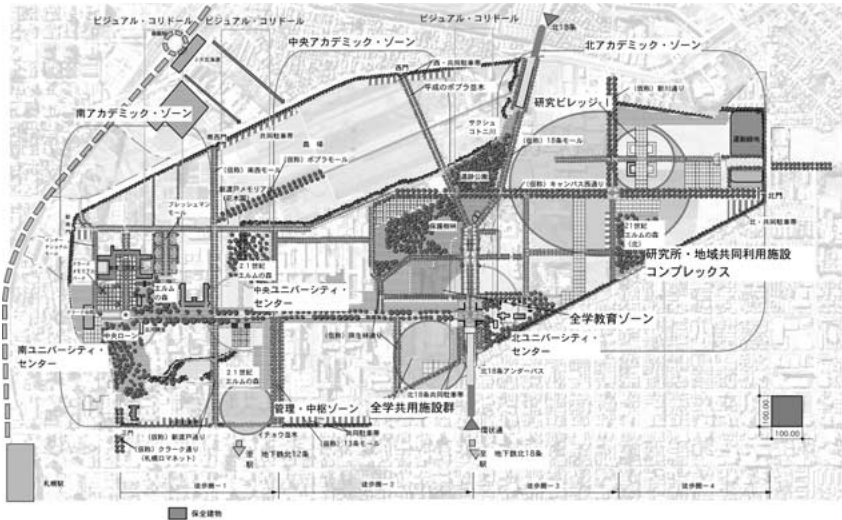


図4-4 「キャンパス・マスタープラン96」 フレームワークプラン

し、三〇年以上の長期の中で位置づけられ、大学キャンパス全体の骨格を示す「大きなマスタープラン」と、その実現化のために五〜一〇年単位のアクションプログラムをもった「小さなマスタープラン」、という二つの考え方に基づくこととした。「キャンパス・マスタープラン<sup>96</sup>」は、現時点における「大きなマスタープラン」である。

また、マスタープランの骨子として、(一)固有のランドスケープの継承と保全、(二)歴史的キャンパス構成の継承と展開、(三)教育研究する「人間の場」としてのキャンパス、(四)社会との関連を持たせたキャンパスの展開、(五)都市の中の都市としてのキャンパス、という五つを掲げた。これらを実現するために、エコキャンパスの創成をかけた環境計画、機能的で安全なキャンパスを形成する交通計画、教育研究の未来像を実現するためのキャンパス空間構成計画を三つの構成要素とした。

まず、環境計画では、構内に創設期より残る樹林群の保護、サクシユコト二川の流れと流域の緑の再生、キャンパス外周緑地の整備を柱として、主要な緑地をネットワークさせることが盛り込まれた。北一八条道路跡地に対する遊歩道の整備や南北キャンパスの連続化、北側キャンパスの環境整備などが大きな目標である。

次に、交通計画では、キャンパスを移動する手段としての車、歩行者、自転車のルートを競合させずに安全に機能できるネットワークシステムを形成することが盛り込まれた。

空間構成計画では、アカデミックゾーン、ビジュアル・コリドール、ユニバーシティ・センターという三つの要素による空間構成を立案した。アカデミックゾーンは、歩行圏を単位とする教育研究生活圏である南、中央、北の三つのゾーンによって構成される。それぞれのアカデミックゾーンはキャンパスの発展成長過程を継承しながら、教育研究環境として独自の特徴を持ち、キャンパス空間の秩序と調和をつくりだすために設定された。将来的には、研究ヒレッジが北アカデミックゾーンに、総合学術情報コンプレックス、ユニバーシティ・ミュージアムが南アカ

デミツクゾーンに整備される計画である。ビジュアル・コリドールは、キャンパス全体の景観を豊かにするため、建築群と自然とで形成される近景・中景に学外の遠景をも含めた空間的特徴を具現化する空間構成軸であり、キャンパス内の三方所に位置づけられる。ユニバーシティ・センターは、周辺の建物といっしょに整備されるアカデミックゾーンの結節点で、南、中央、北の三つのセンターが計画されている。人が集まり交流するための全学共用施設群と広場などのオープンスペースを主体とした空間であり、大学生活の舞台として、キャンパス全体の拠点となるべく計画された。

このように「キャンパス・マスタープラン96」は、それ以前のキャンパスの整備計画が施設単体を単独で整備することを対象としていたのに対して、キャンパス全体に対して建築と外部環境を一体的に整備してゆくことを目標に据えた。これにより、キャンパス整備の方針は大きく変化したのである。

### 第三節 キャンパス計画と連動した施設整備

次に、「キャンパス・マスタープラン96」で策定された計画が実現されてゆく過程について述べる。

マスタープランが具現化した最も早いプロジェクトは、サクシユコト二川の再生計画第一期である。時間的には前後するが、すでに、構内整備の一環として、一九九四年より工学部の南側に隣接する大野池の周辺で、散策用の木道やベンチの整備がある程度進められていた。

その後、「キャンパス・マスタープラン96」でサクシユコト二川の再生が目標となり、九七年にはキャンパス・マスタープランの実現に向け、いわゆる「小さなマスタープラン」と呼ばれるローリングプランとして、「エコ・キャンパス推進基本計画」が策定されるに至ったのである。この計画は、(一)緑地の整備、(二)サクシユコト二

川の再生、(三)野生小動物との共生、(四)外周緑地帯の造成を四つの柱として掲げている。サクシユコト二川の再生のねらいは、原風景の復元という生態学的視点と、環境変化への対応という環境工学的視点の二点に集約される。もともとあった川のような風景を再生させることは、そこにあった生態系自体を再生させることにもなる。身近な生態系の観察や研究が可能な水環境は、北海道大学が以前持っていた大学としての生活を取り戻すことにもつながる。また、キャンパス内の雨水や処理水の流入も想定されたため、水生生物による河川の自浄作用がおきるような植栽計画が立案された。

そこで、サクシユコト二川再生計画第一期では、大野池を水源とし、循環ポンプによって、河川を軸とした生態系の保全・再生、景観および親水性に配慮した約九〇メートルの「メムの流れ」を試験的に新設した。「メム」とはアイヌ語で地下の伏流水が泉となつて地上に吹き出している場所を意味し、サクシユコト二川の源流が「メム」であったことに由来し、このような命名がされた。「メムの流れ」は将来的にはサクシユコト二川の一部となる。また、全面的な再生に向けて、基礎的データを収集する基盤づくりが行われた。同時に、既存の木道を生かし、小河川の生態系をつくる在来種の水生植物を基盤とした植栽並びに大野池への植生導入が行われ、大野池とファカルティハウス・エンレイソウの周辺一帯を、一つの景観としてまとめる整備が一九九八年四月に竣工した。整備手法には、周辺方面を含め、近自然型工法を採用した。これはコンクリートの護岸ブロックなどを用いずに、植物繊維のロールなどを用いて川岸を補強整備する河川整備手法の一つである。これによって、極めて自然の河川に近い状態を再現でき、より多様な生物の生息空間をつくることができる。実際、早期に自然植生が回復し、現在では、キャンパスのオアシスとして一般市民にもよく利用されている。また、この計画をモデルとして、キャンパス全体のサクシユコト二川を再生する計画が進行しており、二〇〇三年には完成の予定である。

一方、施設整備計画に目を向けると、教育研究環境の未来像というキャンパス・マスタープランの目標を実現し

た建築のひとつとして、一九九九年に竣工した「情報教育館」をあげることができる。この施設の最大の特徴は、北海道大学と放送大学との合築建物であることである。建設位置は、高等教育機能開発総合センター（旧教養部）と附属図書館北分館との間であり、それぞれから直接行き来できるように接続されている。高等教育機能開発総合センターは、北海道大学の全学教育科目を受け持つだけでなく、生涯学習の研究を行っている。また、放送大学は放送教育による生涯学習の全国化を推進している。これらを複合化することは、多面的な教育情報の提供を促し、マルチメディア対応の連携を深め、各々の機能を集約化させながら相互に補完することにつながった。施設計画に対する斬新な考え方をもとにつくられた施設と言える。

次に、特筆すべき計画としては、「総合博物館」の設置があげられる。総合博物館は、一九二九年に竣工した理学部本館を改修して設置された。理学部においては、理学部再開発計画が進行しており、本館を使用していた各専攻科は、計画の進行に伴い、順次新棟に移行することになった。そこで、「キャンパス・マスタープラン96」で理学部本館を総合博物館として位置づけ、北海道大学として重要な建築物である理学部本館を保存し、改修して活用するという新たな試みを実施した。総合博物館は、札幌農学校の開校以来現在までにわたる大量の学術標本、資料を総合的に整理保存、展示し、また、独自の企画による様々な研究成果などの情報を発信することで、広く学内外の社会教育に対する寄与も含む多元的役割を持った施設である。改修の方針としては、創設当時の雰囲気を極力残すこととし、当時の空間を再現し、天井を張らずに塗装による直上げとした。天井を張らない仕上げのため、廊下部分に設備要素を集中化し、アルミパネルという現代的な素材をうまく吊りながらそれらを隠している。また、創設当時の趣とディテールを最も残す廻り階段部分には、そのディテールを再生しながら、シースルーのエレベーターを設置し、新旧のハーモニーをつくりだしている。理学部本館の改修工事は二〇〇〇年竣工した。その後、展示計画をもとに施工を行い、二〇〇一年、総合博物館は開館した。



もう一つ新たな施設として誕生したのが、「遠友学舎」である。遠友学舎は、二〇〇一年に北一八条のモデルバーン東隣、旧馬術部馬場跡に、一二五周年記念事業の一環として、寄付によって建設された。遠友学舎は、二一世紀の大学において、地域と大学とのコミュニケーションの拠点として位置づけられた施設である。遠友学舎という名前は、かつての「遠友夜学校」（一八九四年一月に新渡戸稲造夫妻が創設）を通じて、市民との密接なかかわりをもった北海道大学の建学精神を受け継ぎ、さらにこれからの大学と地域の接点として、人々の交流のモデルをつくることが目標とされた。主体構造は、鉄筋コンクリート、屋根部分がテンション材を用いた木造という大胆な構成で、平屋建て、設計は、工学研究科の小林英嗣・小篠隆生である。モデルバーンという北海道大学創設期の風景を最もよく残す地域に隣接するため、大屋根の連続を場所としての原風景の再生として位置づけている。また、建設過程から、地域に開かれた施設として存在するために、一般市民が参加するプログラムを組み込むことを試みている。これは、市民参加によって遠友学舎周辺のランドスケープを形成するものであり、エゾミソハギのポット苗を地域住民とボランティア、学生などと共に植栽している。将来的に学内外の人々の参加によって、北海道大学の佇まいにあわせた風景づくりとその維持管理の運動が展開されて行く予定である。遠友学舎は、教職員、学生のみならず、地域の人々に常時開放され、国際的な知的交流をはじめ、総長や学部長による炉辺談話や文化イベント（コンサート、ギャラリー）、講演会など極めて多様で新しい交流活動を始めている。

以上のように、一九九六〜二〇〇一年のキャンパス空間の変遷は、「キャンパス・マスタープラン96」を背景として、施設単体の整備から、施設自体だけでなく、周辺の外部環境を含めた総体としてのキャンパスの整備が行われたこと、また、施設整備に対して、複合化、歴史的建造物の保存活用、市民の参加といった新しい考え方が導入され、それが実現していった時期であり、新たな世紀へ向けて学内外の新しいニーズに対して対応していこうとするキャンパス空間の大きな変化をみることができる。